

歷々衆へ招かれ、左内へ其御方ののたもふは、此箱の中へ入たるもの有、占て見給へと有ければ、左内占て申けるは、箱の内に有とも、正敷生類なり、何の役にも立物にてなし、國土のつひへ取るに足らぬものなりと、子細らしく申けり、其御方大に感じ笑せ給ひ、是はよく當りたり、何の役にもたらぬ取に足らざる馬鹿者、名を書いて入置きたり、是見られよと、箱を明給へば、紙に平澤左内と書て入給ふ、是は一生平澤左内が占の大あたりなり。

〔先哲叢談後編八〕新井白蛾

或曰、我邦儒流、皆不究易學、大抵從朱子啓蒙等之書、無有異議、至於近世、河田東岡名孝成、字子行、號東岡、因州人、水谷雄棗名君龍、字起雲、號雄棗、備中人、真勢中州名達富、字發真、號中州、尾張人、松井羅州名暉星、字養黃、號羅州、濱華人、片岡如圭名基成、字平師、號如圭、京師人、土肥鹿鳴名貫雅、字秀太、號鹿鳴、江戶人、皆以易學名於世、其筮儀大同小異、各構一家說、然折衷衆義、述已所得、宜以白蛾之說而爲之巨擘。

〔續近世叢談七〕新井白蛾、名祐登、字謙吉、江都人、父祐勝、加賀人、西遊京師、從淺見綱齋學、後遷居江都、白蛾年十三、學于家庭、又奉父命、師事菅野兼山、講究洛閩之學、兼山名彥、字直養、三宅尙齋門人也、白蛾有雋才、年二十二、始聚徒教授、然當時物門之徒、以漢魏古學、李王古文辭、風靡一時、白蛾自知不可與抗、去遊關左諸國、後來京師、研究易義、專倡象數占筮之說、以建門戶、著易書十餘種、以占筮恒有奇中、其業振一世、婦人小童莫不知其名者、世稱曰古易中興、晚應加賀聘、徙於金澤、寬政四年歿、年六十八。

〔先哲叢談後編八〕新井白蛾

名祐登、字謙吉、號白蛾、黃州龍山古易館、皆別號、通稱織部、後以白蛾爲通稱、江戶人、仕于加賀侯中略

白蛾既唱易說於平安、以建門戶、生徒輻湊、而當時儒流、皆以占筮家目之、賤其所爲、嘗詣芥丹邱、相與